

理性と信仰：コペルニクス体系をめぐる自然探求と聖書解釈の問題について

大貫，義久

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

123

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

46

(発行年 / Year)

2003-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005899>

理性と信仰

——コペルニクス体系をめぐる自然探究と聖書解釈の問題について——

大 貫 義 久

はじめに

近代科学はその生成において、ガリレオ裁判という大きな代償を支払った。このガリレオ裁判は1633年に起こり、ガリレオ・ガリレイ個人に対する異端誓絶と彼の著作『二大世界体系についての対話』の完全な出版禁止という不幸な結果をもたらした。そして有罪判決ののち、ガリレオが“Eppur si muove!”（「それでもそれ〔地球〕は動くのだ！」）と吐露したという話はあまりにも有名であり¹⁾、この出来事をよりドラマティックにしている。しかし真に重要なのは、この裁判自体よりもむしろ裁判の不幸な結果をもたらした内的要因であり、それは、1613年のガリレオによる『カステッリ宛の書簡』（12月21日付）の執筆から1616年3月5日の図書検閲聖省によるコペルニクス体系に関する布告の発布までの数年間に形成された。つまりその期間に、コペルニクスの天文体系をめぐる、自然探究における知識の扱いと聖書解釈の関係や、人間にとっての自然探究の意味と自由という問題が積極的に論じられ、これらの問題に関する諸思想が内的要因としてガリレオ裁判を導いたのである。言い換えれば、これらの問題は、西ヨーロッパにおいて近代科学が生成するに当たって不可避の問題だった。

そしてそれらの重要な問題を積極的に扱った幾つかの著作が1613年から1616年の間に書かれた。つまり、ガリレオの前述の『カステッリ宛の書簡』と『ロレーナのクリスティーナ大公妃宛の書簡』（1615年；以下『大公妃宛の書簡』と略す）、パオロ・アントニオ・フォスカリーニの『地球の運動と太陽の不動とに関するピュタゴラス派とコペルニクスの見解、及び世界についての新しいピュタゴラス体系に関する、カルメル会修道院総長セバスティアーノ・ファントーネ尊師宛の書簡』（1615年；以下『ピュタゴラス派の見解に関する書簡』と略す）、ロベルト・ベッラルミーノ枢機卿の『フォスカリーニ宛の書簡』

(1615年)、そしてトンマーズ・カンパネッラの『フィレンツェの数学者ガリレオのための弁護』(1616年；以下『ガリレオ弁護』と略す)である。ガリレオは1609年以降の望遠鏡による月の表面や木星の衛星や太陽黒点の観測により、1613年には太陽中心のコペルニクス体系を公に支持するようになった。しかしこのコペルニクス体系は、文字通りに解釈された聖句の意味と対立していたから、聖書に基づく反論を受けた。それに危機感を抱いたガリレオは自然探究と聖書解釈の関係について『カステッリ宛の書簡』の中で論じた。このガリレオを神学の側から支援したのが、カルメル会の修道士フォスカリーニであった。彼は聖書とコペルニクス体系を聖書の再解釈によって調和させようとした。このようにコペルニクス体系に対する支持が徐々に増大しつつあった情勢の中で、宗教改革以後、トレント公会議(1545-63)を経て、聖書解釈における権威の所在に非常に神経質になっていたカトリック教会は、当時の教会の有力者でイエズス会士のベッラルミーノ枢機卿を中心に反撃に出たのである。ベッラルミーノはコペルニクスの天文学の「学問 (scientia)」としての確実性を否定し、聖書を文字通りに解釈した結果としての「地球の不動・太陽の運動」(すなわち天動説)を支持した。これらフォスカリーニとベッラルミーノの著作の影響下でガリレオは、彼の立場を神学の側面から補強するために『カステッリ宛の書簡』の内容を深めて『大公妃宛の書簡』を書いた。そしてさらにカンパネッラは、コペルニクス体系(地動説)か、それとも天動説かというガリレオやベッラルミーノらの視点から離れ、ガリレオ問題を扱う審議者の資格について獄中で(しかも過酷な上半で)考察し、自然探究の自由を保障することの大切さを『ガリレオ弁護』の中で強調したのである。

この小論は、これまでの研究において積極的に扱われることはなかったが、今日でもなお重要な意味を持ち続けている問題を取り上げる。すなわち、それは、1613年から1616年の時期、近代科学が成立する前夜の西ヨーロッパで真剣に取り上げられていた、理性(自然探究)と信仰の関係についての問題、自然探究することの意味と自由の問題、そして解釈という人間の行為に係わる問題である。小論では、諸外国の最近の研究成果をふまえ、西ヨーロッパにおける自然探究に係わる精神的側面を明らかにしたい。

1. コペルニクス体系への聖書に基づく反論¹²⁾

1609年からの望遠鏡による観測結果をまとめた『星界の報告』を1610年に公

表することによって大きな名声とトスカーナ大公家の保護とを得たガリレオは、その翌年にフランチェスコ・シットゥイによる聖書に基づく初めての攻撃を受けた。そしてさらに1612年に、ルドヴィコ・デッレ・コロンベが本格的にコペルニクス体系を聖書に基づいて批判した。これは、例えば『ヨシュア記』の中の以下のような文章（第10章12-13節）は文字通りに解釈されると、太陽の不動を主張しているコペルニクスの説と矛盾するのではないかということであった。すなわち「…ヨシュアはイスラエルの人々の見ている前で主をたたえて言った。『日（太陽）よ、とどまれ、ギブオンの上に。月よ、とどまれ、アヤロンの谷に。』日はとどまり、月は動きをやめた。民が敵を打ち破るまで」という文章である。他にも『詩篇』（18.6-7,92.1,103.5）や『コヘレトの言葉』（第1章5節）などの中のそのように矛盾しているように見える文章が挙げられ、それら聖句の意味とコペルニクス体系との調和が問題にされた。コロンベらは文字通りに解釈して、これら聖句が天動説を表明しているとし、そして聖書が天文学上の考えを提示していると考えたのである。

1613年に『太陽黒点に関する書簡』を俗語（イタリア語）で公表し、その中でコペルニクス体系を初めて公に支持したガリレオは、自分のパトロンであったトスカーナ大公コジモ2世が主催した朝食会で、聖書とコペルニクス体系の調和の問題が話題になったと弟子のベネデット・カステッリから知らされたとき、聖書に基づくコペルニクス体系への批判に立ち向かう決心をし、『カステッリ宛の書簡』を書いた。この書簡は、検閲官の目を免れるために、出版されず、写され回覧された。その書簡の中でガリレオは、聖書を解釈する際に従わなければならない諸原則を主に論じ、自然に関する知と聖書の関係について考察した。そして、それまで無名ではあったが有能な神学者フォスカリーニがコペルニクス体系の聖書との調和を証明しようとした著作『ピュタゴラス派の見解に関する書簡』を公表することによってガリレオの立場を支持した。この著作は、コペルニクス体系を支持していたガリレオを初めとする人々に好意的に受け入れられたが、しかし他方で、その著作を批判する人々もローマでは少なくなかった。ローマに滞在していて、これら批判を危惧したフォスカリーニは、すぐに書簡の『弁護』を書き、書簡と併せてこれらをベッラルミーノ枢機卿に送り意見を求めた。そのフォスカリーニの要請に応じて、そしてガリレオの『カステッリ宛の書簡』にも目を通してベッラルミーノが書いた『フォスカリーニ宛の書簡』は、自然に関する知と聖書の関係についてのカトリック教会の

正式な見解として注目に値する。この『フォスカリーニ宛の書簡』をガリレオは、フォスカリーニの『ピュタゴラス派の見解に関する書簡』と併せて読み、特に前者のベッラルミーノの書簡について自分の考えを『コペルニクスの見解に関する考察』にまとめ、さらに『カステッリ宛の書簡』を『大公妃宛の書簡』に発展させたのである。それゆえ、これからの論を展開する上で、ガリレオとベッラルミーノのそれぞれの著作の内容について知ることが重要である。

(1). ガリレオ『カステッリ宛の書簡』

ガリレオは、『カステッリ宛の書簡』の中で聖書の陳述とその解釈に関する原則と呼んでもよいものを――彼自身は「原則 (principio)」と呼んで明示しているわけではないけれども――五つ提示する¹⁴⁾。ブラックウェルとマクマリンのそれぞれの最近の研究を参考にして¹⁵⁾、これら原則を見ていくことにしよう。

最初に①聖書の陳述自体は真実であるが、しかし聖書の陳述の中には、一般民衆の能力に合わせて表現されていて、それゆえにそれを文字通りの意味に解釈すると誤りに陥ってしまうものがある。特に、聖書がその本来の目的から離れて、ついでに地球や太陽や、他の被造物について述べているときには注意しなければならない。これをマクマリンは「適合の原則 (Principle of Accommodation)」と呼ぶが、ブラックウェルはこれを原則として挙げず、②の「真理の一致の原則 (Principle of the Unity of Truth)」に組み入れている。

次に①と関連して、②自然と聖書の両方ともが神の言葉に由来しているが、自然は不変であって聖書のように人間の能力に合わせることはしないから、もし両方が、特に聖書がその文字通りの意味を超えて正しく理解されたのであれば、両方の間に矛盾はあり得ない。これをブラックウェルは「真理の一致の原則」と呼ぶが、マクマリンはこれをガリレオ当時の暗黙の了解と考え、原則としてあえて挙げることをしていない。

さらに②と関連して、③自然に関する議論 (disputa naturale) がその結論において感覚的経験と必然的論証により確実に真である場合には、それら結論は自然に関する議論において聖書に優先され、そしてそのような場合、聖書はその自然に関する結論 (conclusionone naturale) に従って再解釈されなければならない。これをブラックウェルは「優越原則 (The Priority Principle)」と呼び、マクマリンは「論証の優越の原則 (Principle of Priority of Demonstration)」と呼ぶ。ここでの「論証 (dimostrazione)」とは、或る前提されたことから、そ

の前提されたこととは異なったことが必然的に導き出される推理であり、それゆえ論証は、自然についての認識という場面では、必然的に結論を導き出す原因（真の原因）を通じての認識である。論証的な知識こそ厳密な意味での「学問的知識」である点では、ガリレオは、ベッラルミーノを初めとする当時の知識人たちと見解を共有していた¹⁵⁾。

また③と逆に、④自然に関する議論がその結論において確実性に達していない場合には、聖句の一つの意味に固執して、のちの自然についての議論における論証がその選択した意味に矛盾することのないようにしなければならない。これを、ブラックウェルは「実用的な規則（The Pragmatic Rule）」と呼び、マクマリンは「慎重さの原則（Principle of Prudence）」と呼ぶ。

そして最後に①と関連して、⑤聖書を口述した聖霊の意図は、信仰と救済に必要な知識をわれわれに与えるということである。この知識は、人間理性の能力を超越した「聖霊の口を通じての」方法以外の学問や他の手段では獲得されない。しかしその知識は、神が人間に与えた感覚や理性に基づく自然に関する知識と矛盾するものではない。これを、ブラックウェルは「聖書の意図についての原則（The Principle of Scriptural Intention）」と呼び、マクマリンは「制限の原則（Principle of Limitation）」と呼ぶ。

さて、このガリレオの『カステッリ宛の書簡』の諸原則と酷似したものをフォスカリーニの『ピュタゴラス派の見解に関する書簡』の中に見出すことができる¹⁶⁾。つまりフォスカリーニの「聖書は、並の知力と一般の人々の普通の言語とに合わせて、それゆえ見かけに従い、真実には従わずに書かれている」という主張や、「聖書には救済の実現以外の他の目的はない」という主張である。前者は「適合の原則」に、後者は「聖書の意図についての原則」あるいは「制限の原則」に酷似している。

(2) ベッラルミーノ枢機卿「フォスカリーニ宛の書簡」

ベッラルミーノはフォスカリーニの要請に応じてコペルニクス体系と聖書解釈の関係に関する自分の見解を三項目にまとめた。

彼は以下のように第一の項目を始める。

第一に、あなたとガリレオ氏は慎重にも、コペルニクスがそう語ったと私が常に信じているように、仮定的に（*ex suppositione*）語り、絶対的には語らないことで満足しているように私には見えると言いましょう。とい

うのは、地球が運動し、太陽が静止していると仮定すれば、あらゆる現象が、離心円や周転円を用いたときよりも、もっとうまく救われると言うのが上手な言い方だからです。そしてここには危険は一つなく、数学者たちにとって、これで十分だからです。²¹

明らかにベッラルミーノはここでガリレオの「カステッリ宛の書簡」を意識しつつ、コペルニクスの「天球の回転について」に言及している。「天球の回転について」は1543年に出版されたが、そこには無署名の「読者へ この著述の諸仮定について (*Ad lectorem de hypotesibus huius operis*)」と題された序文があった。この内容にベッラルミーノは触れているのである。その序文は以下の書き出しで始まる。

動く地球と、さらに宇宙の中心にある不動の太陽とを打ち立てたこの著述の仮定の新奇さについてすでに噂も広まっているので、或る学者たちはひどく憤慨し、すでに久しく正当に打ち立てられている自由学芸を混乱に陥れるべきではないと考えるであろうことを私は疑わない。しかしもし彼らが事柄を厳密に熟考しようとするならば、この著述の著者が叱責に値することを何もしなかったことを見いだすであろう。なぜなら、天文学者の任務は、〔1〕細心の熟達した観測により諸天界の運動誌を蒐集すること、次に〔2〕天界運動の真なる原因や仮定を〔天文学者は〕どんな方法によっても決して獲得することができないのであるから、過去および未来にわたって、それら運動が幾何学の諸原理から正確に計算されるような類いの前提なら何であれ、そうしたものを考察し虚構することである。さて本作者はそのいずれをも見事になしとげた。なぜなら、それらの仮定は真実である必要はなく、また本当らしいということさえ必要なく、むしろ観測に合う計算をもたらすかどうかという一事で十分だからである。²²

この序文は、印刷監督をしたルター派の神学者アンドレアス・オジアンダーがアリストテレス派や神学者の側からのコペルニクス説への敵対的反應を恐れて書いたことが今日知られているが、しかし出版されてから長い間（少なくともここで問題にされている1615年の時点でもなお）、一般的にはコペルニクス本人が書いたものと考えられていた²³。そして天文学についての伝統的な考え方をこの序文は表明している²⁴。すなわち、天文学は諸天界の運動についての観測的事実を集めるが、しかし天界の運動の真なる原因や仮定を決して獲得できず、ただそれら運動が幾何学の諸原理から正確に計算されるような類いの

前提を虚構することができるだけである。そして天文学の仮定は真実である必要はなく、また本当らしいということさえ必要なく、むしろ視測に合う計算をもたらすかどうか、言い換えれば現象を救うことができるかどうかという一事で十分なのである。天界の運動の真の原因を探究し、それについて真の仮定を立てるのは、天文学ではなく自然学である。

ここでベッラルミーノの書簡に戻り、二つのことに注目したい。まず第一に、ベッラルミーノが誤って、この序文をコペルニクス自身の手によるものと考えていることである。それゆえ、天文学は天界運動の真なる原因や仮定を決して獲得することができないのであるから、コペルニクスの天文体系は「真実でない仮定」として現象を救うことができれば、つまり視測に合う計算をもたらすことができれば、数学者たちには、それで十分であるとベッラルミーノは主張する。彼にとって天文学は視測に合う計算をもたらす数学にすぎないのである。ここには、数学を一段低い学問として蔑視していた当時の風潮を、垣間見ることができるであろう⁹⁹。次に第二に、ベッラルミーノは再び誤って、フォスカリーニもガリレオも「真実でない仮定」としてコペルニクス体系を扱っていると述べていることである。フォスカリーニもガリレオもコペルニクス体系を、単に現象を救うことができるだけの「真実でない仮定」とは考えていなかった。フォスカリーニは、コペルニクス体系が「近い将来において確実な真理として論証されるであろう」ということを強く信じていた¹⁰⁰。それゆえに彼は、そのときに備えて、ガリレオの敵対者たちにより文字通りに解釈されてコペルニクス体系に矛盾するとみなされていた聖句を再解釈し、それらがコペルニクス体系に一致することを証明しようとした。そしてガリレオは正しく、「天球の回転について」の無署名の序文がコペルニクス本人によるものでなく、コペルニクス自身も彼の体系を「真実でない仮定」とは決して考えていなかったことを見抜いていた¹⁰¹。このガリレオがコペルニクス体系に対してどのように考えていたかということについては、のちに詳しく触れることにする。

ベッラルミーノは第二の項目としてトレント公会議の布告を思い出させ、以下のように主張する。

第二に、あなたも知っているように、〔トレント〕公会議は聖書を聖なる教父たちの共通の同意に矛盾して解釈することを禁じていると私は言います。そしてもし教父たちの著作ばかりでなく、昨今の注釈者たちの『創世記』や『詩篇』や『コヘレトの言葉』や『ヨシュア記』についての注釈

も読めば、彼らはみな、太陽は天空にあって、地球の周りを迅速に運動していると、そして地球は天から離れて、世界の中心で不動であると、文字通りに (ad literam) 解釈することに同意しているのが分かるでしょう。……また、このことは〔フォスカリーニとガリレオが主張していたように〕信仰の問題ではないと答えることもできません。なぜなら、主題という点から (ex parte obiecti) 信仰の問題ではないとしても、語っている者という点からは (ex parte dicentis)、それは信仰の問題であるからです。従って、アブラハムに2人の息子はおらず、そしてヤコブに12人の息子はいなかったと言うことは、キリストは処女から生まれなかったと言うことと同様に、異端的とされるでしょう。なぜなら、両方のことが、聖霊により預言者や使徒たちの口を通じて語られているからです。¹⁴⁴

要するに、ベッラルミーノによれば、トレント公会議の布告に従って教父や昨今の注釈者たちの共通の同意から、問題になっている聖句が「文字通り」に「地球の周りでの太陽の運動、世界の中心での地球の不動」を意味すると解釈されなければならない。この「文字通り」という語は、ベッラルミーノによれば、作家が意図している意味と、ごく普通の読者が、使用されている語から取る率直な意味との両方を持つ。そしてさらに、これら天文の事柄は、『ヨシュア記』などの聖書に記されている限り、信仰の問題なのである。

ここで重視されているのは、トレント公会議の第4会議において1546年4月8日に発布された布告の聖書解釈に係わる次の箇所である。

さらに、いらついた心を押さえるために、公会議は以下のことを布告する。すなわち、キリスト教の教化に係わる信仰と道徳の問題においては、何人も、自分自身の判断に頼って、そして自分自身の考えに従い聖句を曲解して、聖句の真の意味を判断することがその任務である聖なる教会が保持してきた、そして保持している意味と矛盾して、あるいは教父たちの全員一致の同意に矛盾してさえも、聖句をあえて解釈してはならない。¹⁴⁵

この布告では、キリスト教の教化に係わる信仰と道徳の問題に限って、教会の伝統的な解釈と教父たちの全員一致の同意に矛盾して聖句を解釈してはならないと命令している。その限りで、太陽の運動と地球の不動という主張が、キリスト教の教化に係わる信仰と道徳の問題だという保証はないから、つまり、その主張を信仰と道徳の問題とする教父たちの全員一致の同意は見いだせないから、ベッラルミーノは公会議の布告を超えて、決して伝統的でない新しい考

えを導入する¹⁴⁶。つまり、聖書に書かれていることはすべて、聖霊が語っているのだから、信仰の問題であり、従って聖句の中に見られる天文的な事柄についての陳述も信仰の問題である。そしてそれら陳述は伝統的には文字通りに「太陽の運動と地球の不動」を意味すると解釈されてきた。ベッラルミーノによれば、聖書が聖霊によって語られている限りで、聖句はすべて信仰の問題について述べており、従って聖書の隅々まで文字通りの意味で解釈することに権威が与えられなければならないのである。ここには、宗教改革の指導者たちと長い年月にわたって論争をすでにしていたベッラルミーノを、垣間見ることができる¹⁴⁷。彼は皮肉にも、伝統的な文字通りの解釈に固執するあまり、伝統から誤って逸脱してしまった。

最後に第三の項目をベッラルミーノは以下のように述べる。

太陽は世界の中心にあり、そして地球は第三天にあるということと、また太陽が地球の周りを動いているのではなく、むしろ地球が太陽の周りを回っているということの真の論証が、もしあるのなら、その場合には、その論証と矛盾しているように見える聖句を非常に注意深く解釈することに取りかからなければならないでしょうし、そしてまた、論証された何らかのことが偽りだと主張するよりも、むしろそれらの聖句をわれわれが理解していなかったと主張しなければならないと私は言います。しかし私は、何かそのような論証があるとは思っていませんし、また今までに、何一つとしてそのような論証が私に提示されたこともありません。太陽が世界の中心にあり、地球は第三天にあると仮定することによって諸現象は救われるということを示すことは、実際に太陽は世界の中心にあり、地球は第三天にあるということを論証することと同じではありません。最初の〔諸現象は救われるということの〕論証ならあり得ると思いますが、しかし二番目の〔実際に太陽は世界の中心にあり、地球は第三天にあるということの〕論証については、あり得るかどうか私は大いに疑っています。そして疑いのある場合には、教父たちによって解釈された聖書の意味を捨て去るべきではありません。¹⁴⁸

ベッラルミーノは自然と聖書についての「真理の一致の原則」に従い、もし世界の中心での太陽の不動と太陽の周りでの地球の運動というコペルニクスの説が真に論証されたのならば、そのときには、その論証と矛盾しているように見える聖句を注意深く解釈し直す必要がある、と主張する。しかし、そのよう

な論証があるとは思えないし、またこれまでそのような論証が示されたこともないと彼は言う。そもそも、『天球の回転について』の序文を誤ってコペルニクス自身のものとして読んでいたベッラルミーノにとって、コペルニクスの説は、それが天文学の説である限りは、真に論証されることはあり得ないのである。なぜなら、コペルニクス自身が自分の説をそのように考えていたからである。そして上の引用文よりも少し後の箇所、地球の不動と太陽の運動の説はわれわれの明白な感覚的経験から確実であるとされる。それゆえ、聖句を再解釈する必要はないとベッラルミーノは結論する。

さてここで、ベッラルミーノの考えをまとめてみよう。彼によれば、聖書の陳述は聖霊が語ったことであるから、聖句のすべては、たとえそこで述べられていることが天文的な事柄であっても、信仰の問題なのである。信仰の問題である限り、トレント公会議の布告に従い、天文的な事柄が述べられている聖句は伝統的な文字通りの解釈により「太陽の運動・地球の不動」を意味しているとされなければならない。しかし、もし「地球の運動・太陽の不動」を主張するコペルニクスの説が真に論証されるのならば、そのときには聖句は解釈し直されなければならない。だが、コペルニクス説は、それが天文学の説である限り真に論証されることはあり得ない。従って、コペルニクス説は「仮定的に (ex suppositione)」のみ語られるべきである。これこそがベッラルミーノが真に言いたかったことではないだろうか。そしてここには、ガリレオ裁判の過程を初めて精神史として詳細に扱った『ガリレオと科学と教会』(1971年)の著者ラングフォードが想定した寛大なベッラルミーノ、つまり「あなたの理論を証明しなさい。そうすれば、われわれはわれわれの聖書解釈を変えるだろう。そうしないのなら、その理論を、現象を救う仮定として教えなさい。」⁽⁹⁾と主張するベッラルミーノは存在しない。

ところで、この「仮定 (suppositio)」という語についての分析をガリレオは『コペルニクスの見解に関する考察』の中で行っている⁽¹⁰⁾。彼はコペルニクスの見解をめぐって、二つの異なる「仮定」を提示する。一つは、第一で、自然の絶対的な真実に係わる「仮定」であり、それは「天体の運動はすべて円であり、規則的である」とか「天は球形である」とかいう、哲学的天文学者たち (gli astronomi filosofi) が立てる「仮定」である。もう一つは、第二次的で、計算を容易にするために置かれ、自然において真実でない「仮定」であり、それは離心円と周転円といった、理論 (数学的) 天文学者たち (i puri astronomi)

が立てる「假定」である^④。ガリレオははっきりと、コペルニクスの見解は自然の絶対的な真実に係わる第一の「假定」であると断言している。この分類に従えば、ベッラルミーノはコペルニクスの見解を「第二次的な假定」としたことになる。天文学を数学として学問的に低く見ているベッラルミーノはガリレオと異なり、天文学に哲学を認めず、自然哲学と天文学を完全に分離している^⑤。

これまで述べられたことから、ベッラルミーノは、ガリレオの『カステッリ宛の書簡』の中にわれわれが見た原則に反論を加えているように思える。ベッラルミーノは、教会や教父たちによる伝統的な文字通りの解釈を最重視しているので、文字通りの解釈以外の聖書解釈を提示している「適合の原則」や「真理の一致の原則」をほとんど無視している。またベッラルミーノは、彼に意見を求めたフォスカリーニの主張も無視している。フォスカリーニは『ピュタゴラス派の見解に関する書簡』の中で、聖書が神について、あるいは被造物に固有なものについて、何かを語るときには、文字通りの解釈以外の仕方でも聖書が解釈されなければならないことを主張している。つまり、聖書は、比喩的に語ったり、われわれの人間の考察・判断・思考・理解・認識などの仕方から従って語ったりしているし、また民衆の意見や普通の話し方から従って語ったり、「怒りなどの人間の感情」を神に与えることで人間的な特徴の外観を呈して語ったりしているから、聖書は、それらの語り方に応じて解釈されなければならないのである^⑥。フォスカリーニは自分への批判を危惧して書いた『弁護』の中で、教父アウグスティヌスやトマス・アキナスらを引用して、自分の主張の伝統的な正しさを示したにもかかわらず、その主張はベッラルミーノには受け入れられなかった。さらに、文字通りの意味に固執し聖書の陳述のすべてを信仰に係わるものとするベッラルミーノが、ガリレオの「実用的な規則（慎重さの原則）」（以下、括弧内はマクマリンの呼び方）も「聖書の意図についての原則（制限の原則）」も受け入れないとしても驚くに当たらない。結局ベッラルミーノは、五つの原則のうち、ただ「優越原則（論証の優越の原則）」だけを認めているように見える。それでもガリレオには希望があるように見えたのだろうか。なぜなら、ガリレオは『大公妃宛の書簡』では、この原則の「論証」に強くこだわることになったからである。当時の彼に、本当に希望はあったのだろうか。この問を抱きつつ、次に、ガリレオの『大公妃宛の書簡』を扱うことにする。

2. ガリレオ『ローレーナのクリスティーナ大公妃宛の書簡』

フォスカリーニの『ピュタゴラス派の見解に関する書簡』と『弁護』、そしてベッラルミーノの『フォスカリーニ宛の書簡』を読んだガリレオは、『カステッリ宛の書簡』の内容を拡張し修正して、『大公妃宛の書簡』に仕上げた。その拡張と修正の作業は、ベッラルミーノの主張（『フォスカリーニ宛の書簡』の第二項目）の影響を受け、『カステッリ宛の書簡』の内容を神学の伝統から補強することであったから、ガリレオは、彼よりも神学に通じていたベネディクト会の修道士で弟子のカステッリに頼った⁴⁰。そしてガリレオは、アウグスティヌスや他の教父たちによって自分の主張を補強しようとした。その結果、この『大公妃宛の書簡』には、『カステッリ宛の書簡』からの内容的な継承と拡張、そして内容の修正が存在することになったのである。『大公妃宛の書簡』は1616年の6月頃に仕上げられ、そして写され、回覧された。

(1)、『カステッリ宛の書簡』から継承されている「原則」

ガリレオはアウグスティヌスや他の教父たちの著作を引用することで、まず誤った聖書解釈とその解釈を用いることによってコペルニクスの説を非難している自然学者たちに対して反論し、自然の知に関する（特に天文学に関する）問題での聖句の使用について自分の見解を述べ、それから、自然に関する知と信仰との関係についての誤った理解に基づいてコペルニクスの説を非難している神学者たちに対して反論し、それらの関係について自分の見解を展開する。そして最後に彼は、コペルニクスの説を非難するために持ち出された『ヨシュア記』の一節（第10章12-13節）が逆にコペルニクス説と一致するものであることを証明しようとする。

『カステッリ宛の書簡』から、四つの原則が引き継がれている。まず「適合の原則」が主張されている。つまり、聖書の陳述自体は真実であるが、しかし聖書の中には、一般民衆の能力に合わせて表現されていて、それゆえにそれを文字通りに解釈すると誤ってしまうものがある。特に聖書がその本来の目的から離れて、ついでに地球や太陽や他の被造物について述べているときには注意が必要である⁴⁵。次に「真理の一致の原則」が述べられる。自然と聖書の両方ともが神の言葉に由来しているが、自然は不変であって聖書のように人間の能力に合わせることはしないから、自然に関する議論では、聖書の権威から始められるべきでなく、感覚的経験から、また必然的論証から始められるべきで

ある。テルトゥリアヌスが言うように「神は自身の姿を聖書の言葉の中にと同様に、自然の出来事の中にも見事に現している」²⁸⁰。さらに「優越原則（論証の優越の原則）」が主張される。つまり、自然に関する結論が確実に真実である場合には、われわれはこの結論を論証された真理と一致するものとして、最も相応しい仕方でも聖句の真実の意味の説明に役立てなければならない²⁸¹。そして最後にアウグスティヌスの文章が引用され「聖書の意図についての原則（制限の原則）」が述べられる。つまり、聖書を口述した聖霊は、魂の救済に何の関係もないことをわれわれが学ぶのを望まなかったし、またパロニウス枢機卿が言うように「聖霊の意図は、いかに天があるかではなく、いかに天に赴くかをわれわれに教えることである」²⁸²。

(2). 原則の付加と修正

以上の四つの原則が引き継がれ、さらに明らかにベッラルミーノの影響で、ガリレオは公会議の権威を最高の権威として認めることを述べ²⁸³、トレント公会議の布告を二つの原則として付け加える。つまり、まず第一の原則として、個人による勝手な聖書解釈をさせないために、聖書解釈に関する極めて重要な決定についての権限を神は、最も思慮深い教父や聖人たちの最高の権威に委ねた²⁸⁴。次に第二の原則として、或る命題が信仰上真実であるということは教父たちの全員一致の同意で決定されるということである。この第二の原則に関しては、ガリレオは以下の三つの見解を述べる²⁸⁵。まず、この原則は、教父たちによって熱心に議論され、検討され、そして一方の側について、またそれと対立する他方の側について熟考された結果、教父たちがみな、一方の側を非難し、他方の側を認めることに同意するような、そういった命題にのみ適用される。しかし、教父たちは、いかなる場合においても、「太陽の不動・地球の運動」の説あるいは「太陽の運動・地球の不動」の説を熟考していない。次に、この原則は、トレント公会議で明確に定められたように「信仰」と「教義の教化」といった事柄にのみ適用される。しかし、前述の説は両方とも信仰の事柄でも教義の教化の事柄でもない。そして最後に結論として、教父たちは、聖書の中にある天文的な事柄について彼らが述べているわずかなことに対して、全員一致で同意してはいない。こうしてガリレオは、ベッラルミーノの「フォスカリーニ宛の書簡」の第二の項目の考えを認めない。つまり、トレント公会議の布告に従って、教父たちの全員一致の同意から、天文的な事柄につ

いて述べられている聖句が文字通りに「太陽の運動・地球の不動」を意味すると解釈され、天文的な事柄であれ、それが聖書に記されている限りでは信仰の問題であるとするベッラルミーノの考えにガリレオは正しく異論を唱えているのである。ここまでは、研究者たちの中で意見の相違はないのであるが、しかし以下のガリレオの主張に関しては違いが生じる。

さらに、信仰の事柄に係わらない命題においてさえ、その聖書の権威は、論証的方法によってではなく、むしろ単なる物語から、あるいはまた確からしい議論で書かれている人間の著作のすべての権威に優先されなければならないということが大いに当を得ており、必要なことだと私はみなさなければなりません。それは、神の知恵が人間の判断や憶測のすべてに勝るのと同様にです。しかし、われわれに感覚や理性や知性を与えたその同じ神が、これらの能力の使用を後回しにして、それら能力を通じてわれわれが獲得できる知識を他の手段によってわれわれに与え、そうして感覚的経験や、あるいは必然的論証によって目や知性の前にあらわにされる自然についての結論においてさえ感覚ないし理性をわれわれに否認させようと神が望んできたなどと信じなければならないとは私は思いません。特に、聖書においてほんのわずかなものが、それも断片的な述べ方で書かれている学問においては、そうなのです。まさに天文学こそそのような学問です。¹²⁰

ここでガリレオは、信仰の事柄に係わらない命題においてさえ、聖書の権威は、論証的方法でなく、むしろ単なる物語や確からしい議論で書かれている人間の著作のすべてのものに優先されなければならないと主張し、そして以下のように言う。

この世界の賢人たちの著作の中には、真に論証された自然に関する事柄と、他のただ教示されただけの事柄とがあります。前者の事柄に関しては、それらの事柄が聖書に矛盾しないことを示すことが賢明な神学者たちの仕事です。後者の、教示されているだけで必然的に論証されてはいない事柄に関しては、もしそこに聖書に矛盾するものがあるのならば、それは疑いなく偽りであるとみなされなければなりませんし、そしてあらゆる可能な手段によってそうであると論証されなければなりません。¹²¹

こうして、真に論証された自然に関する事柄と、ただ教示されているだけで必然的に論証されてはいない事柄とが区別され、特に後者の事柄については、もしそこに聖書に矛盾しているものが含まれているのなら、それは偽りとみなさ

れなければならぬとされる。そしてさらにガリレオは以下のように主張する。

自然に関する命題の或るものは、确实で論証的な知識が獲得されるよりもむしろ人間の何らかの思弁や議論によって何か確からしい意見や真実らしい憶測がすぐに獲得されうる命題であり、例えば、星々は靈魂を持っているかどうかという命題がそのようなものです。自然に関する命題の他のものは、経験によって、長期間の観察によって、そしてまた必然的な論証によって疑い得ない确实さを持っている、あるいは持つことができると確信され得る (o si può credere fermamente che aver si possa) 命題であり、それは、大地 (地球) と太陽は運動するか否か、大地は球形であるか否かといったものです。最初の命題に関しては、人間理性が到達できない場合には、従って、それについての确实な知識 (scienza) を人は持つことができず、むしろただ意見や信念を持つことができるだけである場合には、敬虔に、聖書の文字通りの意味に絶対的に従わなければならないということ、私は決して疑ってはいません。¹³¹⁾

ここでは、自然に関する命題においてさえ、人が确实な学問的知識を持つことができず、むしろ単なる意見や信念を持てるだけである命題については、聖書の文字通りの意味に絶対的に従わなければならないと主張されている。

以上の三つの引用文では、順に、信仰の事柄に係わらない命題でも、そしてただ教示されているだけの事柄でも、さらに最後に自然に関する命題においてさえ、論証的方法によって知識が獲得されるのでなければ、聖書の権威が優先されるということが主張されている。

これらガリレオの主張をブラックウェルは、「実用的な規則」の放棄としてガリレオのベッラルミーノへの譲歩だと考える¹³²⁾。なぜなら、『カステッリ宛の書簡』では「自然に関する議論がその結論において确实性に達していない場合には、聖句の一つの意味に固執して、後の自然に関する議論における論証がその選択した意味と矛盾することがないようにしなければならない」(実用的な規則)と言われているのに、この『大公妃宛の書簡』では、自然に関する命題のうちの确实性に達していないものについては、聖書の文字通りの意味に絶対的に従わなければならないと主張されているからである。ところで、コペルニクスの説はその当時、确实性には達していなかった(そうガリレオは認めていた)のだから¹³⁶⁾、『大公妃宛の書簡』の主張により聖書の文字通りの意味(太陽の運動・地球の不動)に絶対的に従わなければならないことになる。そ

ここでブラックウェルは、確実性に達していない自然に関する命題を、a 原理的に論証され得ないものと、b 論証され得るが、現在のところ論証されていないものに分け、コペルニクスの説をガリレオはbの命題とし、聖書の文字通りの解釈に従うことを回避した、と考えた。そしてさらにブラックウェルは、ガリレオには、aの命題とbの命題を区別する明確な基準がなく、そのことがその後のガリレオ事件を不幸な結果へと導いた要因だと主張する¹³⁷。問題になっている「大公妃宛の書簡」の主張は実際にガリレオの譲歩なのだろうか。ブラックウェルのテキストの理解は正しいのだろうか。

恐らくガリレオは譲歩などしていないだろう。むしろ、コペルニクスの説は感覚的経験と必然的論証によって確実な知識に（現実にはなっていないとしても）なり得るのだから、天文的な事柄が述べられている聖句の文字通りに解釈された意味（太陽の運動・地球の不動）に従う必要はないとガリレオは考えていた。トレント公会議の布告に関するベッラルミーノの主張に反論したガリレオが簡単に譲歩するとは思えない。そもそもブラックウェルはテキストを正しく読んでいない。ガリレオは、自然に関する命題を、A 確実に論証的な知識が獲得されるよりもむしろただ確からしい意見や真実らしい憶測が獲得されるだけの命題と、B 感覚的経験と必然的論証によって、疑い得ない確実さをa持っている命題、あるいはb 疑い得ない確実さを持つことができると確信され得る命題とに分けている。ブラックウェルはAの命題を、確実性に達していない自然に関する命題として、それをさらに、原理的に論証され得ないものと、論証され得るが、現在のところ論証されていないものに分け、コペルニクスの説を後者のものとしたのだが、しかしテキストを読めば明らかのように、コペルニクスの説はAの命題でなく、むしろBの命題のうちのbである。つまり、ガリレオはコペルニクスの命題を、感覚的経験と必然的論証によって疑い得ない確実さを持つことができると確信され得る命題とみなし、それゆえに聖句の文字通りに解釈された意味に絶対的に従う必要などないと考えていたのである。「カステッリ宛の書簡」の問題になっている文章もテキストに忠実に訳せば、「もし聖句の意味を固定して、いつか感覚と論証的で必然的な議論とが、それと矛盾したことをわれわれに明示するかもしれないところの若干の自然に関する結論 (alcune conclusioni naturali, delle quali una volta il senso e le ragioni dimostrative e necessarie ci potessero manifestare il contrario) を真実なものとして主張しなければならぬと誰かに強制することが許されないのなら、慎重

に事がなされたと私は信じます」³⁸⁹ となり、コペルニクス説は「若干の自然に関する結論（ここでは天動説）と矛盾することをいつかわれわれに明示するかもしれない論証的で必然的な議論」なのである。従って、問題にされた「大公妃宛の書簡」の主張は、「実用的な規則」の放棄でもガリレオのベッラルミーノへの譲歩でもなく、むしろ「カステッリ宛の書簡」の主張の延長線上にあり、ガリレオの自信の表れである。なぜなら、実際にガリレオは当時、彼の「潮斥論」がコペルニクス説の決定的な証拠になると（誤ってはいたけれども）信じていたからである³⁹⁰。また、ブラックウェルが不明確とした基準も何の問題も起こさないであろう。なぜなら、まず区別は先のAの命題とBの命題との間でなされ、そこでは「人間の何らかの思索や議論によって（con ogni umana specolazione e discorso）何か確からしい意見や真実らしい憶測がすぐに獲得される命題」と「経験によって、長期間の観察によって、そして必然的論証によって（con esperienze, con lunghe osservazioni e con necessarie dimostrazioni）疑い得ない確実さを持っている（あるいは持つことができると確信され得る）命題」という、確からしい意見と確実な知識のそれぞれを獲得する方法の違いが、それら知（確からしい意見と確実な知識）を区別する重要な基準になっているからである。それに、「経験・観察・必然的論証」の方法によって確実な知識を獲得できると確信され得る命題の例として「地球と太陽は運動するか否か」というものが挙げられ、この命題には、コペルニクスの地動説ばかりでなくアリストテレス・プトレマイオスの天動説も入っているのだから、人間の「経験、観察、必然的論証」の対象に少なくともなる（最終的に確実に論証されるかどうかは別として）ということがその命題を、「人間の何らかの思索や議論」の結果としての「確からしい意見や真実らしい憶測」から区別する重要な基準になっていることがわかるのである。確からしい意見しか獲得されない命題の例として挙げられた「星々は靈魂を持っているかどうか」という命題は、星々は感覚的に経験できるから、自然に関する命題だとしても、その答えを出すことは、つまり観察を経て理性によって論証することは明らかに不可能である。この命題は、人間理性が到達できない領域にあり、明らかに「地球と太陽は運動するか否か」という命題とは質的に異なる。「星々は靈魂を持っているかどうか」という命題はガリレオにとって「難解で、人間の論証によっては確実な知識をもつことができないと確信され得る命題」であり、アウグスティヌスが『創世記逐語解』で主張するように信仰の領域に属す

る⁴⁰⁾。

またここでは、確実な知識が「すぐに、あるいは容易に (piu presto)」獲得できるものではなく、むしろ「長期間にわたる観察や論証」の努力によってようやく獲得されるものであることを、ガリレオは述べようとしているのではないだろうか⁴¹⁾。そしてそれはまさに、彼自身がコペルニクス説を観察と論証によって確実な知識にしようとしていた当時の状況に重なる。ガリレオにとって自然探究とは、テルトゥリアヌスが言うような神の現れとしての自然が、感覚的経験や理性の論証的方法を駆使した人間の努力の結果、徐々にその真の姿を人間に示す過程なのである。このことについてガリレオは、また次のように主張する。「もしわれわれが聖霊の口から「神は世界を人間の探究に委ねた。だから人間は、神が最初から最後まで成し遂げてきた仕事を見いだすことはできない」(『コヘレトの言葉』第3章11節)ということを知ったのなら、私の考えでは、そのような格言に背いて、あたかも世界や自然の事物のすべてがすでに確実に見いだされ明らかにされているかのように、それらの事物について自由に哲学することの道を閉ざしてはならないのです」⁴²⁾。

さて、前掲の引用文で実際に問題になるのは「実用的な規則」の放棄ではなく、むしろそこでの主張が、「聖書の意図は、信仰と救済に必要な知識をわれわれに与えることである」とする「聖書の意図についての原則(制限の原則)」と対立することである。なぜなら、引用文の主張は信仰以外の問題でも、つまり自然に関する知においても、聖書が権威を持つことがあり得るというものであったからである。この主張をガリレオの誤りとして、すでにラングフォードが指摘していた⁴³⁾。それでは、ガリレオはここで「聖書の意図についての原則」を捨てたのであろうか。「聖書の意図についての原則」が前掲の引用文のすぐ後の箇所⁴⁴⁾で「パロニウス枢機卿の言葉として述べられているのだから、その原則を捨てたと考えるのは、無理があろう。引用文は、むしろ論証的方法によって獲得された確実な知識は聖書の権威に優先されないこと、そして特に天文学という学問では、神によってわれわれ人間に与えられた感覚と理性という能力に基づく感覚的経験や必然的論証を通じて確実な知識をわれわれが獲得すべきであることを、強調するために、このような述べ方になったのではないだろうか。それは裏を返せば、コペルニクス説は感覚的経験と必然的論証を通じて確実な知識になるのだという確信がガリレオにはあったということであろう。

さてマクマリンは、『大公妃宛の書簡』の問題とされている主張を、ガリレオが『カステッリ宛の書簡』を執筆したのちに読んだアウグスティヌス『創世記逐語解』により立てた新しい原則と考え、これを「聖書の優越の原則 (Principle of Priority of Scripture)」と呼ぶ³⁶⁾。そしてマクマリンは、この原則と「実用的な規則」(彼の呼び方では「慎重さの原則」)との前述された対立(彼の言葉では「緊張 tension」)を強調する。彼によれば、ベッラルミーノを初めとして当時の神学者たちは、神学の側面から「聖書の優越の原則」とトレント公会議の布告の第二の原則(教父たちの全員一致の同意)を重視し、そして自然に関する知の側面では「論証の優越の原則」を認め、他の「適合の原則」や「慎重さの原則」や「制限の原則」を認めていなかった。従って、コペルニクス説が論証による確実さを持っていない(実際にそのようにガリレオ自身も認めていた)限りでは、ガリレオには絶望しかなかった。マクマリンによれば、コペルニクス説は「論証され得るが、まだ論証されていないもの」では弱すぎて、「聖書の優越の原則」を克服し「論証の優越の原則」を満たすことはできない。そしてこの絶望の背景には、当時のアリストテレス派の影響を受けたガリレオの「学問的知識 (scientia)」についての考え方がある、とマクマリンは主張する。ガリレオは、厳密な意味での「学問的知識」は論証的知識であると考えていた。この考えに従い、ガリレオはコペルニクス説を論証的知識にすることに飽くまでこだわったのである。

以上のマクマリンの見解は、彼の詳細な研究ゆえに注目には値するけれども、しかしその見解について、問題点が指摘できるように思われる。つまり「慎重さの原則」と「聖書の優越の原則」は彼の主張するような緊張関係にはなく、むしろガリレオの考えの中では、すでに見たように「聖書の優越の原則」は「慎重さの原則」の延長線上にある。これら二つの原則の間にマクマリンが緊張関係を見るのは、彼がテキストを無視し、現実に論証されている知識だけをこれら二つの原則に係わるものとしているからである。すでに指摘したように、テキストを読めば、ガリレオが強調している区別は、「人間の何らかの思弁や議論」と「感覚的経験や必然的論証」という方法の間の区別と、それら方法によって獲得される「何か確からしい意見や真実らしい憶測」と「疑い得ない確実さ」という知の間の区別である。ガリレオにとっては、「疑い得ない確実さを持っている命題」と「疑い得ない確実さを持つことができると確信され得る命題」(マクマリンの言葉では「論証され得るが、まだ論証されていない主

張)との間には、テキストを読む限りでは、意図的にそうしたのかは不明であるけれどもイタリア語の“o”(あるいは)が置かれ、違いがないように思われる。「いつか疑い得ない確実さを持つことができると確信され得る」という言葉から、ガリレオにとっての自然探究が、そして少なくとも当時の彼のコペルニクス説に係わる探究が、観察と論証の過程であったということが読み取れないだろうか。しかしベッラルミーノにとっては、マクマリノが主張するように、現実に論証されていることが「論証の優越の原則」を満す絶対の条件であった。そしてベッラルミーノによれば、天文体系としてのコペルニクス説には、すでに見たように論証の可能性すら存在しないのであった。以上のことから、ここでの真の問題は、ガリレオが自説への自信のあまりベッラルミーノの真意を理解しそこねたことだ、とは言えないだろうか。

ベッラルミーノは、彼がコペルニクス自身がそうしたと考えたようにガリレオたちもコペルニクス説を「仮定的に (ex suppositione)」,つまり現象を救う数学的虚構として語るのならは何の問題もないことを主張していた。しかしガリレオによれば、コペルニクス自身は自分の説をそのような数学的虚構としての仮定とはせず、むしろ「自然の絶対的な真実に係わる仮定」とみなしていた。そして天文学者には二つの種類があり、一つは、計算を容易にするために周転円や離心円を導入する「数学的天文学者」であり、もう一つは、現象を救うという要請を超えて、世界の真の構成を探究する「哲学的天文学者」である。ガリレオは自らを、そしてコペルニクスを、哲学的天文学者と考えていた。従って、コペルニクス説は哲学的天文学者の主張として、確実な論証的知識となり得るのである。このガリレオの考えは天文学についての伝統的な考えを逸脱したものであったから、つまりその考えは、天文学が自然学の領域を侵犯することを意味していたから、ベッラルミーノには理解しがたいものであった。さらにガリレオは、ベッラルミーノが学問として一段低く見ていた数学を積極的に評価し、それを取り入れて数学的自然学の構想へと向かうのであった。ガリレオは、このような新しい学問観を抱いていた一方で、「確実な学問的知識」については、それを「論証的な知識」とする伝統的なアリストテレスの考え方を当時の知識人たちと共有していた。それゆえに、ベッラルミーノが伝統的な考え方から天文体系として一段低く見ていたコペルニクス説を、なんとしても「学問的知識」としてベッラルミーノらに評価させようとする涙ぐましい努力をガリレオはしたのである。コペルニクス説はガリレオにとって、近代科学的

な方法としての「仮説演繹法 (hypothetical-deductive method)」における「確からしいものとしての仮説」であってではならなかった。ガリレオは新しい数学的自然学を、それに見合った学問方法論についての新しい考え方ではなく、むしろ古い考え方で「学問」に高めようとした過渡期の人物であった¹⁶⁾。

結びにかえて

これまで述べてきたことから、コペルニクス体系に係わるガリレオ事件を以下のように自然探究と聖書解釈の問題としてとらえることができるように思われる。すなわち、自然と聖書が同じ神の言葉に由来し、自然の真理と聖書の真理が一致する（真理の一致の原則）がゆえに、もし人間によって適切な方法で自然が理解され、そして聖書が正しく解釈されたのならば、自然探究と聖書解釈の間に矛盾は起こり得ない。それゆえ、矛盾が生じたときには、自然についての理解か聖書についての解釈かどちらかが誤ったことになる。そしてコペルニクス体系をめぐるガリレオ事件はこの事態をもたらしたのであった。この視点から見ると、ガリレオ事件に係わった人たちの見解をいっそう明瞭にすることができる。ベッラルミーノは、天文的な事柄もそれが聖書に述べられている限りで信仰の問題であるとした上で、聖書についての文字通りの解釈の仕方を正しいと考え、そして「太陽の運動・地球の不動」以外の解釈を認めず、ガリレオらの自然理解に誤りがあるとした。フォスカリーニは聖書解釈の文字通り以外の多様な仕方を認め、彼が正しいと考えていたコペルニクス説との調和を図った。ガリレオもフォスカリーニと同様に聖書解釈の多様な仕方を認めた。彼によれば、聖書は、特に天文を含む自然についての難解な事柄について、一般の人々の理解力に合わせて書かれており、文字通りの意味という面では様々な仕方でも述べられているので、もし聖句を文字通りの意味に解釈すると誤ってしまう可能性がある。これに対して、自然は神の命令（言葉）の最も忠実な実行者として、人間の理解力に合わせることはなく不変で一様であり、そして自分に課せられた法の限界を決して越えることはないから、自然について理解する際には、聖書の權威に頼るべきではなく、むしろ直接的に（つまり感覚的経験を通じて）自然そのものを探究するべきである。しかし人間が経験・観察・論証という方法を通じて自然に関する真の理解に達するまでには、「自然はその働きの秘密の道理と仕方が人間の能力によって明らかにされるかどうかなど全く気にかけない」¹⁷⁾ から、長い時間がかかるのである。こうしてガリレオ

は、コペルニクス説が確実さを求める過程にあり、その過程に聖書の權威によって妨害を置かないように言いたかったのであろう。しかしガリレオはコペルニクス説への自信のあまり『大公妃宛の書簡』の中では一歩進んで、自然に関する命題でも、確実な論証の知識よりもむしろ確からしい意見がすぐに獲得されるようなものについては聖書の文字通りの意味に絶対的に従わなければならないと主張した。当時の時点でコペルニクス説は、ガリレオの考えに従えば「現に疑い得ない確実さを持っている命題」ではなく「疑い得ない確実さを持つことができる」と確信され得る命題であった。ガリレオによれば、自然探究者（哲学的天文学者）は常に経験・観察・論証という適切な方法で自然についての確実な知識を求めるのであり、その点で彼においては「現に確実さを持っている命題」と「確実さを持つことができる」と確信され得る命題の間の差は意識されない。それゆえに、コペルニクス説を放棄して、聖書の文字通りの解釈に従うという必要はないのである。しかし神学者のベッラルミーノにおいては、「現に確実さを持っている命題かどうか」だけが問題であり、確実さを持っている命題だけが彼の文字通りの解釈を変更させる力があつた。そして彼によれば、天文学説としてのコペルニクス説には、論証の可能性すら存在しないのであつた。それゆえに、コペルニクス説は現象を救う数学的な虚構として「仮定的に」語られなければならないし、そして天文的事柄についての聖書の文字通りの解釈（天動説）を変更する必要はないのである。ここには、論証的な知識だけを「学問的知識」とみなす伝統的な知識論の枠の中で、天文学をめぐる新旧の考え方の拮抗があつた。ガリレオは伝統の枠を超えた哲学的天文学をコペルニクス説に当て、その説が世界の真の構造を探究するものであり、学問的知識であり得ることを主張し続けた。他方、ベッラルミーノは天文学と自然哲学をはっきりと区別していた。

ベッラルミーノはコペルニクス『天球の回転について』の序文に関して誤解し、そして聖書解釈についても伝統に固執するあまり伝統（トレント公会議の布告）から誤って逸脱してしまった。しかしガリレオの方も、彼自身の考えに従って、コペルニクス説は、当時の時点では疑い得ない確実さをまだ持っておらず、その限りで天動説と同様に、ただ経験や観察や論証の対象となるに過ぎない（つまり最終的に論証されるかどうかまだ分からない）命題であることを認める慎重さを持つことができたであろうが、しかし現実には、コペルニクス説がすぐにでも論証されるかのような、あるいはすでに論証されているかのよ

うな印象を読者に与える書き方をしてしまった⁴⁴⁾。彼らの間に誤解が生じても不思議ではなかったし、そして実際に誤解は生じた。こうして1616年3月5日に、図書館総長省はベッラルミーノ枢機卿の考えに従い、コペルニクス体系について論証する試みを禁じる不幸な布告を發布してしまったのだ。彼らの時代は、宗教改革に対してカトリック教会が対抗して起こした反宗教改革の激流の中にあった。その激流の中で神学者と自然探究者の両方の側が、神の言葉に由来する「自然と聖書」のそれぞれを理解するという人間の行為において、時間的な許容と自由を、また解釈の多様性を認める寛大さと、何か一つの理解や解釈に決定する際の慎重さを見失っていた。皮肉にも、異端とスペイン政府に対する陰謀の兼で獄中にいたカンパネッラだけが、彼らの時代こそ、その寛大さと慎重さが要求されている時代であることに気づいていた。しかし彼の声は、不幸なことにガリレオやベッラルミーノらに届かなかった。このカンパネッラの『ガリレオ弁護』については稿を改めて述べることにする。

〈注〉

- (1) この“Eppur si muove!”という言葉をガリレオが実際に発したのか否かという問題について、ドレイクは、この言葉が異端審判の後に裁判官たちに向かって反抗的に発せられたという、われわれがよく耳にする話を事実でないとするが、しかし他の時期に他の場所で、その言葉が実際に発せられた可能性を指摘している。
Cf. S. Drake, *Galileo at Work*, The University of Chicago press, 1978, pp. 356-357.
- (2) この項目全体にわたって以下の著作を参照した。 R. J. Blackwell, *Galileo, Bellarmine, and the Bible*, University of Notre Dame press, 1991. S. Drake, *op. cit.* J.J. Langford, *Galileo, Science and Church*, The University of Michigan press, 1966; all rights rv. 1971.
- (3) Galileo Galilei, *Lettera a D. Benedetto Castelli*, in *Le Opere di Glileo Galilei*, Edizione Nazionale, Nuova Ristampa, Firenze, G. Barbèra, Editore, 1968, vol. 5, pp. 281-298. 以下『訂定版ガリレオ全集』については、Opereと略し、巻数をアラビア数字で表す。
- (4) Blackwell, *op. cit.*, 53-85. E. McMullin, *Galileo on science and Scripture*, in *The Cambridge Companion to Galileo*, Ed. P. Machamer, Cambridge University Press, 1998, pp. 271-347.
- (5) ガリレオは青年期において、ベッラルミーノが属するイエズス会のローマ学院 (Collegio Romano) で行われた論理学講義の影響を受け、アリストテレス『分析論後書』の注釈を書いた。W. A. Wallace, *Galileo and His Sources; The Heritage of the Collegio Romano in Galileo's Science*, Princeton University Press, 1984, ch. 1. —, *Galileo's Logic of Discovery and Proof; The Background, Content, and Use of His Appropriated Treatises on Aristototele's Posterior Analytics*, Dordrecht; Kluwer Academic Publisher, 1992, Preface.

- (6) Paolo Antonio Foscarini, *Lettera sopra l'opinione de'Pitagorici e del Copernico, della mobilita della Terra e stabilita del Sole, e del nuovo Pittagorico sistema del mondo al Reverendissimo P.M.Sebastiano Fantone, Generale dell' Ordine carmelitano*, in Napoli Per Lazaro Scoriggio, 1615., p.22, 32., in Tommaso Campanella, *Apologia per Galileo*, a cura di Paolo Ponzio, Bompiani Testi a fronte (Milano), 2001., p.211, 216.
- (7) Roberto Bellarmino, *Lettera a Paolo Antonio Foscarini*, in *Opere*, 12, p.171.
- (8) *Nicolai Copernici Torinensis De revolutionibus orbium coelestium, Libri VI., Norimbergae apud loh. Petreium*, 1543. コペルニクス『天球の回転について』高橋憲一訳、みすず書房、1993年、9頁(訳文中の〔 〕内は訳者による付加)。なお、高橋訳の“hypothesis”の訳語である「仮説」を「假定」と変え、また読み易くするために少し訳を変えた。
- (9) 同書、47頁、訳注(1)を参照。「天球の回転について」の1566年版も1617年版も、この序文には執筆者が明記されなかったため、一般読者はそれをコペルニクス自身によるもの判断してしまった。ただし、『新天文学』の著者ヨハネス・ケプラーは彼の師のメストリンから聞いて、『天球の回転について』の印刷監督をコペルニクスの唯一の直弟子ゲオルク・ヨアキム・レティクスから引き継いだオジアンダーがその序文を書いたことを知っていた。またケプラーは『新天文学』の序文で、聖句の意味が「適合の原則」と「聖書の意図についての原則(制限の原則)」とを結合したものであることを主張している(Cf. McMullin, *op. cit.*, pp.299-302)。
- (10) Cf. P. Duhem, “ΣΩΖΕΙΝ ΤΑ ΦΑΙΝΟΜΕΝΑ: Essai sur la notion de theorie physique de Platon à Galilee,” 1908. *To Save the Phenomena; An Essay on the Idea of Physical Theory from Plato to Galileo*, trns. from French into English by E.Doland and C.Mascher, The University of Chicago Press, 1969, pp.10-11.
- (11) イエズ会のローマ学院(Collegio Romano)では、長い間、数学は存在と価値を抽象しているとして蔑視されていた。Cf. Wallace, *Galileo's Logic of Discovery and Proof*, pp.111-113.
- (12) Foscarini, *op. cit.*, p.13. Ponzio, *Campanella*, *op. cit.*, pp.206-207.
- (13) Galileo, *Lettera a Piero Dini, 23 marzo 1615*, in *Opere*, 5, pp. 297-298.
- (14) *Opere*, 12, p.172. なお〔 〕内は筆者による付加。以下もこれに準ずる。
- (15) Blackwell, *op. cit.*, Appendix I, p.183.
- (16) Langford, *op. cit.*, pp.62-63. McMullin, *op. cit.*, pp.282-283.
- (17) Blackwell, *op. cit.*, ch.2., pp.29-51.
- (18) *Opere*, 12, p.172.
- (19) Langford, *op. cit.*, p.77.
- (20) Galileo, *Considerazioni circa L'Opinione Copernicana*, in *Opere*, 5, p.357, 364.
- (21) Galileo, *Prima lettera al Marco Velseri circa le macchie solari*, in *Opere*, 5, p.102.
- (22) McMullin, *op. cit.*, pp.279-280., n.20, p.329.
- (23) Foscarini, *op. cit.*, pp.19-20. Ponzio, *Campanella*, *op. cit.*, p.210.
- (24) カステリはガリレオのために、名前は不明だがバルバサ会の司祭にアウグスティヌスや他の教父の文章を送ってもらった可能性がある。このようにしてガリレオは、自説の支持のために持ち出すことのできる教会の権威者たちの文章を手に入れたのであろう。ガリレオはアウグスティヌスの『創世記逐語解』を主要な資料と

- し、そして聖書学の当時の権威であったイエズス会士のベニート・ペレイラによる『創世記』についての注釈書に頼っている。 Cf. McMullin, *op. cit.*, pp.287-288.
- (25) Galileo, *Lettera a Madama Cristina di Lorena*, in *Opere*, 5, pp.315-316.
- (26) *Ibid.*, p.316.
- (27) *Ibid.*, p.317.
- (28) *Ibid.*, p.319. ところで、バロニウス枢機卿は当時の教会の有力者であり、カトリック世界で影響力を持った『教会年代記』全12巻（1607年完）の著者である。ガリレオは欄外の注で、引用の言葉をバロニウスのものとしている。バロニウスは1598年にベッラルミーノ枢機卿と共にバドヴァを訪れており、たぶんその時にガリレオはバロニウスと会ったのであろう。 Cf. S. Drake, *Discoveries and Opinions of Galileo*, Doubleday Anchor Books, New York, 1957, p.186, n. 8.
- (29) *Ibid.*, p.314.
- (30) *Ibid.*, p.322.
- (31) *Ibid.*, pp.335-337.
- (32) *Ibid.*, pp.317-318.
- (33) *Ibid.*, p.327.
- (34) *Ibid.*, p.330.
- (35) Blackwell, *op. cit.*, pp.79-80. ガリレオの主張をラングフォードはブラックウェルよりも手厳しくベッラルミーノへの「屈服」とする (he [Galileo] yields). Langford, *op. cit.*, p.73.
- (36) *Opere*, 5, pp.367-370.
- (37) Blackwell, *op. cit.*, pp.81-82.
- (38) *Opere*, 5, p.284.
- (39) 潮の干満の原因を地球の公転運動と自転運動とに求めるガリレオの潮汐論は当時においても説得力に欠けていた。 McMullin, *op. cit.*, p.287., n.50., p.334.
- (40) *Opere*, 5, pp.331-332.
- (41) 「神自身の作品である天という開かれた書物の中には、多くの深遠な神秘や崇高な意図が存在します。それゆえ、非常に明敏な才能を持った多数の人たちの不眠の苦勞と努力と研究は、数千年にわたる不断の探究によっても、それら神秘や意図をまだ完全に看破してはいないのです。」 (*Opere*, 5, p.229.)
- (42) *Opere*, 5, pp.320-321.
- (43) Langford, *op. cit.*, p.78.
- (44) *Opere*, 5, p.319.
- (45) McMullin, *op. cit.*, pp.295-296, 308.
- (46) しかしガリレオは実際の自然探究においては様々な「仮定 (suppositiones)」を用いていた。 Cf. W.A. Wallace, "Aristotele and Galileo: The Use of Hypothesis (supposition) in Scientific Reasoning", 1981, in *Galileo, the Jesuits and the Medieval Aristotele*, Hampshire: Variorum, 1991, pp.64-73. —, *Galileo's Logic of Discovery and Proof*, pp.147-148.
- (47) *Opere*, 5, p.316.
- (48) この書き方をガリレオは意図的に行ったのではないとラングフォードは考える (Langford, *op. cit.*, pp.75-76)。それに対してモスは、論文「コペルニクス体系についてのガリレオの著作における証明のレトリック」の中で、ガリレオは『大公妃宛

の書簡』では「感覚的経験と必然的論証によって」という語を意図的に繰り返し使い、コペルニクス体系があたかも論証されているかのような印象を読者に与えようとしていると考え、それがガリレオのレトリックであるとする (Jean. D. Moss, "The Rhetoric of Proof in Galileo's Writings on the Copernican System", in *Reinterpreting Galileo*, ed. by W. A. Wallace, The Catholic University of America Press, 1986, pp.179-204)。しかし、ラングフォードが言うように、論証されているかのような印象を与えようとする意図はガリレオにはなかったであろう。またモスとは異なって、マクマリンは、『大公妃宛の書簡』はレトリックの面では失敗作であるとしている (McMullin, *op. cit.*, p.289)。

(イタリア哲学・第二教養部兼任講師)